

# 令和7年度 小・中学校教育課程研究協議会に係る各部会の改善の重点

部会名

小学校 特別の教科 道徳

## 改善の重点

- ① 指導の意図（主題設定の理由）を明確にした中心発問を設定し、発問構成を考えること。
- ② 評価については、道徳科の目標にある学習活動に基づき、期待する児童の発言や記述等から、具体的な姿を見取る方法を工夫すること。

## 1 設定理由

道徳科の目標には、求められる学習活動として、以下のような学習の要素が示されている。

- ・「**道徳的価値を理解する**」とは、道徳的価値を、単に知識として理解させることではない。道徳的価値のよさや大切さ、道徳的価値を実現することの難しさ、道徳的価値に関わる考え方は多様である等の3つがある。道徳的価値の大切さのみを深めようとする、分かりきったことを発言させたり、教師の思いを押しつけたりする授業になる場合が多い。
- ・「**自己を見つめる**」とは、児童が教材の登場人物の置かれた状況に対して、「もしも自分だったらどうか」と自分事として考えたり、これまでの自分の経験を想起したりしながら、考えている姿のことである。
- ・「**多面的・多角的に考える**」とは、物事を一面的に捉えるのではなく、様々な視点から理解することである。例えば、思いやりには、「手を差し伸べる思いやり」もあれば、「見守る思いやり」もある。 等

道徳科の学習を充実させるには、明確な教師の指導の意図（主題設定の理由）が大切になる。まず、ねらいとする道徳的価値を学習指導要領解説で理解する（価値観）→ねらいとする道徳的価値に関わるこれまでの指導や児童のよさや課題等を明らかにする（児童観）→児童の実態を踏まえ、教材のどの場面を中心に考え、話し合わせるのが適切か吟味する（教材観）。このように主題設定の理由を明らかにした上で、まず中心発問を考え、次に中心発問を生かす前後の発問（基本発問）を考え、全体の流れを構想すると、有効な場合が多い。

道徳科の評価は各教科と違い、個人内評価となる。道徳性の育成につながるような児童の学習状況を見取っていく。道徳科で目指す学習状況は、目標に示される学習活動を行っている児童の姿となる。

例えば、以下のような児童の姿（発言や記述等）を見取り、評価資料を蓄積していく。

- ・道徳的価値の大切さだけでなく、難しさ、多様さという様々な側面について考えている姿。
- ・現在の自分自身をふり返り、自らの行動や考えを見直している姿。
- ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面を、多面的・多角的に考えている姿。 等

## 2 研究を進めるに当たって

(1) 実践に当たっては、以下の点に留意すること。

- ・中心発問に対する児童の反応が3～4つ程度予想できるものを設定すること。複数の反応が予想される発問は、多面的に考えたり、話し合ったりする活動が期待できる。
- ・授業の中で、道徳科ノートやワークシートに記述させる際には、1単位時間において、1～2回が妥当な場合が多い。本当に書かせる必要があるか、吟味して設定すること。
- ・指導者によるエピソードノートへの記録、学年部や互見授業等の他の指導者による記録、児童の自己評価や相互評価等、学習状況や道徳性に係る成長の様子を記録する方法を工夫すること。

(2) 参考とすべき資料

- ① 「『道徳科』評価と授業構想の在り方」（令和6年3月）大分県道徳教育指導資料
- ② 「『考え、議論する』道徳科授業へ」（令和4年2月）大分県教育庁チャンネル